

後置詞「をもって」の機能

林 淳子

1. はじめに

動詞のテ形から派生した後置詞の機能は多次元にわたる。後置詞の機能が多次元にわたるとは、文のなかでどのような成分を示すかという観点からみて多様であるということである。全 2004 によれば、動詞テ形のもとの機能は複文の先行句節を形成することなのであるが、複文においては陳述の中心が後続句節にあることから先行句節は従属性を帯びやすい。その従属性が増すにしたがって述語性を失い、先行句節は後続句節の拡大要素となり、さらには陳述語や機能語へ移行するのである。このように動詞テ形の文法化が進み、そのそれぞれの段階で機能が固定されることによって、動詞テ形派生の後置詞は多次元にわたる機能を獲得したと考えられる。

そこで本稿は、動詞テ形派生の後置詞のなかでも文法化の度合いが高いと思われる「をもって」をとりあげ、その機能が従来の研究で指摘されてきた格表示機能だけでなく多次元にわたる様子を明らかにし、そのような「をもって」の複数の機能の相互はどのようにつながりがあって、ひとつの形式で多様な機能を実現しているのかを考察することを目的とする。その際、後置詞がはたらく次元として以下の三つを設定する。

- I. 文が描く事態の直接構成要素のひとつ（主語・補語）を示す。
- II. 文が描く事態に必須の要素ではないが、事態内容を豊かにする規定的要素（修飾成分）を示す。
- III. 事態を描き述べる部分から離れて、その事態を文として述べるときの態度や前提など事態にとって外在的な情報（状況成分・陳述成分）を示す。

ただし、以下で観察する「をもって」の機能が必ず次元Ⅰ～Ⅲのどれかだけに属するわけではないことに注意しなければならない。後置詞が文法化によって獲得した機能は幅広く、かつそのひとつひとつの機能が文が描く事態に対してどれほど直接的に構成要素としてかかわるかには段階があるが、連続的である。以上の三つの次元はその目安となるポイントにすぎない。

なお、本稿は格助詞との比較などの観点から「をもって」を単位とするが、その機能が格助詞的機能にとどまらないということから、複合格助詞ではなく、後置詞という名称を用いる。

2. 「をもって」の機能

まず、後置詞「をもって」が文のなかで何を示すかによって、その機能を以下のように分類する。¹

また、この機能の特徴をより明らかにするために、「置き換え」可能な格助詞を合わせて示す。後置詞と格助詞は、日本語において名詞を文中の他の語や部分とむすびつける機能語である点で共通し、ときにはある後置詞とある格助詞以外はすべて同じ要素が同じ語順で並ぶ、大きく意味の違わない二つの文を作ることがある。そのように後置詞と格助詞の「置き換え」が可能であるとき、当該後置詞の機能と当該格助詞の機能は非常に近いといえ、そこから後置詞の機能的特徴をより正確に把握できると思われる。そこで、「をもって」の各機能がどの格助詞に置き換え可能なのか、もしくはどの格助詞にも置き換え不可能なのかを調べることによって、各機能の後置詞の機能的特徴をより明らかにするとともに、機能分類の妥当性を確認することができる。なお、以下では紙幅を考慮して、それぞれの機能の文を示すときに「剣術をもって／で身をたてる」のように示す。このとき「／」の左側の「をもって」が用例の出典通りであり、右側は本稿筆者による置き換え操作の結果である。また「／」の右側の「×」は、操作の結果どの格助詞にも置き換え不可能であることを表す。

①動詞の項（対象）

動詞の項とは動詞の意味を充足して事態を構成する要素のことである。動詞の項がどのような意味をもって動詞の意味を充足するかは、動詞によって充足を必要とする意味も異なるし、動詞の項たる名詞の種類やとる格によっても異なる。「をもって」が動詞の項を示す場合、その意味は動詞が表す関係づけ・定義づけといった行為の対象である。

- (1) そこで、愛弟子の三沢千代太郎をもって／を後つぎとした。(剣客)
- (2) わたくしはこの作品をもって／を、山本さんの戦後第一段の躍進とみたい。(さぶ)
- (3) この涼しい顔は心臓をもって／を人体の一番高尚な微妙な器官だと信じこむところの思想に関係している。(焼跡)
- (4) ところがこの熊五郎は、戦後の不況が訪れだしたころ、急転直下、社会主義者ををもって／を任じた。(楡家)

「をもって」の示す名詞が動詞とともに事態を構成するのは、(1)～(3)のように、「をもって」が示す名詞をA、ト格補語をBとすると「行為の対象AをBの状態にする(考える、感じる)」という意味構造をとる場合にほぼ限られる。この構造をとらない(4)において、この意味構造のBに当たる名詞を補うとすれば「自分の立場(と)」などのような主語「この熊五郎」を所有者とする再帰的要素となる。表面には現れていないこれをBと想定すると「A=B」という要素間の関係づけを動詞が行う点(1)～(3)の意味構造と共通しており、(4)の場合も「をもって」が示す名詞は事態を構成するのに必須の項である。このような動詞の項は②で扱う動詞の非必須項に比べて対象性が高い。また、「をもって」が示すのは行為によって定義づけられたり、変化を与えられたりする対象であるから、この「をもって」をすべて格助詞「を」に置き換えることができるのは当然であろう。

②動詞の非必須項(手段・道具)

後置詞「をもって」は、事態を成立させるのに必要な要素ではあるが動詞の意味を充足する必須性のない項を示す場合もある。このとき、「をもって」が示す名詞と動詞は①のように論理的な格関係をむすぶのではなく、「をもって」がその意味を媒介して名詞を、既に格関係をむすばれた動詞と他の名詞のまとまり(他動詞と主語・目的語のくみあわせ、もしくは自動詞と主語のくみあわせ)にむすびつける、と言ったほうがふさわしい。このときの「をもって」が示す名詞の意味役割は、名詞の種類によって「手段」と「道具」に分けることができる。抽象的なことがら—実際にはそれを何らかの方法で具体的に行使することで手段たりうるのだが—を表す名詞は手段を、具体物を表す名詞は道具を表す。このとき、手段や道具は動詞が表す行為の具体的な内容(何を通して行為が実現するか)を規定しているとも言える¹¹⁾。「をもって」で示される名詞は意味を付与して事態内容を規定する点で、修飾成分に非常に近くなる。

a. 手段

- (5) 一栄の父の千賀氏は幕府天文方に属して、数学をもって／で仕えた。(焼跡)
- (6) 「剣術をもって／で身をたてるつもりならば、若いうちは女に気を散らしてはならぬ」(剣客)
- (7) オランダの提案による日本の連盟への加入を承認する。ついては、法令をもって／で貴国における一手輸入業者を定め、年間の所要量を知らせてもらいたい。
(人民)
- (8) 汚職事件で弟が上司を、死をもって／でかばったかどうか、もちろん知りません。
(点と線)

この機能の「をもって」はすべて、同じく手段を表すとされる¹²⁾「で」で置き換えることができる。

b. 道具

(9) はじめてのとき、わしは木刀をもって／で只ひと撃ちに打ち倒したものだ。(剣客)

(10) 惟光は、源氏がずんずんとしてゆくのであわてて馬の鞭をもって／で草の露を払いつつ、案内した。(新源氏)

(11) こっちは活眼をもって／で、たちどころに見やぶったね。(焼跡)

これも、道具を表すとされる¹³⁾「で」による置き換えが可能である。

道具を示す「をもって」はすべて「で」で置き換えることができるが、「身をもって」の形で慣用的に定着しているものが唯一の例外である。

(12) 私は別に私利私欲で医者になろうとしているのではありません、自分が永らく病気に悩み、女医の必要を身をもって／~~X~~体験したからこそです。(花埋み)

③限界

「をもって」が示す名詞が事態の時間的限界を表すことがある。

(13) 四十歳をもって／を初老とすることは東洋の智慧を示している。(人生論)

(14) これをもって／で、わたくしの信仰告白を終わらせていただきます。(塩狩峠)

(15) 七月八日にお預かり致しましたオパールの指輪は、来る十月七日をもって／で／に流質となりますので御知らせ致します。(冬の旅)

「四十歳」という時点において「初老とする」という事態が、「これ」という段階において「信仰告白が終わる」という事態が、「十月七日」という時点において「指輪が流質となる」事態が成立する。その一方で格構成に注目すれば、ト格補語をもつ(13)

(15)に顕在的なように、(13)～(15)の例は①動詞の項(対象)の場合のように「AをもってBとする」の形で「対象AをBの状態と定義する、考える」という意味構造をとっている。ただし、これらの例では時間軸上のある点が対象Aに据えられた結果、時間的限界を表現して状況成分になる点で①動詞の項(対象)とは一線を画される。こうして事態の構成要素となる場合と、事態を外側から特徴づける場合と、表現効果の結果としてそれぞれはたらく次元は異なっても「をもって」自体は対象を据えるという同じ役割を負ってはたらいっているものと見られる。また、(14)「わたくしの信仰告白」(15)「…オパールの指輪」のようにヲ格項で行為対象がしめされていることによって、「をもって」の示す名詞が①のように行為対象を示すのではなく、時間的限界を表すという表現効果への解釈が促進される。

格助詞への置き換えに関しては、動詞「(～と)する」の存在によって①と同様の意味構造が存在することが明確な(13)のような文においては、「をもって」は①動詞の

項(対象)の場合と同じく、行為対象を示す格助詞「を」で置き換えることが可能である。一方、(14)のように動詞の具体的・実質的な意味が強く現れることにより「定義する、関係づける」という意味が裏面化され、それに伴って「をもって」が行為対象を示すという色合いは薄れ、状況成分的に時間的限界を表す様相が強くなれば、限界を表す「で」で置き換えることができる。反対に、この場合には①動詞の項(対象)と同じ意味構造が裏面化されているために、①動詞の項や(13)の「をもって」のように「を」へ置き換えることはできない。「をもって」が示す名詞はまた、時間であるゆえに状況成分的でもあるから、(15)のように時間軸上の一点であることが明白な名詞は時間・空間を表す「に」で示すこともできる。こうなるともう、「定義する、関係づける」行為の対象であることは背景へ追いやられており、やはり「を」で示すことはできなくなる。

④付帯

「名詞+をもって」が事態に付帯することがらを示すことがある。

- (16) そして片腕を突いて掌に顔を埋め、ぼんやりと煙草などをくゆらせていると、表通りから出征を祝う人々のざわめきや、歌声や、万歳の叫びなどが、何とも言えぬ悲しげな余韻をもって／×聞えて来た。(草の花)
- (17) 井上に目の前でこうして明るさまにすばすばやられると、太郎自身、煙草など煙いばかりだと、実感をもって／×思うのである。(太郎)
- (18) 十六歳の娘は娘なりに男への夢を抱いていた。三年前、利根を上った時はそれはたしかな具体性をもって／×拵がっていた。(花埋み)
- (19) 仙吉に近づきたれでもを一応は疑惑警戒の眼をもって／で迎えるのが習性となり、(焼跡)

付帯することがらとは、その事態の中心たる行為・運動の主体(「出征を祝う人々のざわめきや、歌声や、万歳の叫びなど」「太郎自身」「男への夢」)がその行為・運動に際して伴っているものごとである。その点で、事態に付帯することがらは中心たる主体にくっついて事態の中に食い込んでいるともいえる。一方、事態が成立するか否かになんの影響も与えていない、あくまでそれに伴っているだけと考えれば事態の外側にあり、非常に副詞的だともいえる。そしてそのどちら寄りかということは連続的である。

(16)～(19)はいくらか事態の中に食い込んでいるように思える例であり、たとえば(18)では「たしかな具体性をもって」を抜きにして「それは拵がっていた」だけでは文として意味をなさないであろう。事態内容を規定する点で必須性の高い成分なのである。

しかし、(19)の「疑惑警戒の眼をもって」と同様に付帯することがらが主体の身体的様子であっても、(20)の「笑顔をもって」は完全なる修飾成分であり、「課長の外山三郎が加藤を迎えた」という事態はこのプラスアルファの要素がなくても成立する。

(20) 課長の外山三郎は笑顔をもって／で加藤を迎えた。(孤高)

これはつまり、「をもって」がどの次元ではたらくかに関しては、これが示す名詞の種類によって決定されるのではない、ということである。はたらく次元を左右するのはあくまでその名詞が事態の叙述においてどのような意味を、すなわちどのくらい必須の意味を担っているかということである。また、この「をもって」は「で」への置き換えが可能である。

具体的な身体の様子などでなく、「をもって」が示す名詞が抽象的な概念や感情を表すものになると、「名詞+をもって」全体で主体が事態に対して抱く態度を表すことになる。この場合も「で」へ置き換えが可能な例とどの格助詞にも置き換えが不可能である例がある。

(21) 以前の周二なら当然二の足を踏むような行為をも、彼は別人のように余裕をもって／で実行することができた。(楡家)

(22) 然るに頑固な彼は医者にはならない決心をもって／で、東京へ出て来たのです。(こころ)

(23) 正が確信をもって／×いうと、小ツルもまげようとはしない。(二十四)

(24) 彼もまたあすなるだなど、鮎太は好感をもって／×若いカメラマンを眺めた。(あすなろ)

(25) そうしてこの疑問には誰も自信をもって／×答える事が出来ないのだと思った。(こころ)

(26) ぼくは興味をもって／×元旦はここで観察してたもんです。(楡家)

そもそも事態に付帯することがらとは、事態に際して主体が伴っている身体の様子や感情・抽象的概念であるのだが、この「伴う」ということを表す後置詞「をもって」は、この後置詞の派生源の一つである動詞「持つ」の意味を多く残しているといえる。したがって、(21)～(26)のように「(名詞)を持つ／持っている」の形でその感情や概念を有する状態を言うことのできる名詞（「確信を持っている」「興味をもつ」）の例の「をもって」は、後置詞「をもって」の付帯の機能なのか動詞「持つ」の中止形がラ格項をとったものなのかを決するのが難しい”。ここに至って付帯の「をもって」は派生源の動詞「持つ」のテ形にもっとも近づくのである。

また、主体の付帯状況というよりむしろ、主体がある状態を付帯しているがゆえに、述語まで含めて事態全体がある状態を伴っていることを表す場合もある。この場合はす

べて「で」へ置き換えが可能である。

- (27) その言葉は森閑とした昼の中に異様な調子をもってで繰り返された。(こころ)
- (28) 機動隊もさるもの、巧妙に、機能的に、組織的に、いかにも市民の治安を維持する如き装いをもってで徹底的に弾圧してくる。(二十歳)
- (29) こんな単に紙と活字との集積にすぎぬ本を、非生産的な逃避の心境をもってで読みふけていてよいものなのか。(楡家)

このように、主体が行為に際して伴っているものごとを示す付帯の機能の「をもって」は、はたらく次元、すなわち事態へくい込む度合いに次元ⅠからⅢまで幅がある。しかし、格助詞への置き換え可能性は、はたらく次元に左右されない。どの次元ではたらく④付帯の「をもって」も「で」に置き換えられる場合とそうでない場合とがある。この置き換え可能性を左右するのは、「をもって」がはたらく次元ではなく、「をもって」が示す名詞が「だ」をともなって述語たりうる可能性である。「をもって」ではなく「で」が名詞に付いて付帯状況を示すとき、デ格の名詞全体は主体が付帯するものごとというよりむしろ主体の様態である。「で」と「をもって」それぞれの派生源を比べると、「で」の派生源「にて」「にありて」「にして」などⁱⁱⁱは④付帯の「をもって」の派生源「持つ」よりも素材的に無色透明であるがゆえに、名詞を状態述語化して修飾成分にし、様態を示すことができる。つまり、「で」で示される様態は「だ」を伴って状態を示す述語になりうる名詞に限られているのである。「で」への置き換えが可能なのは(22)は「頑固な彼は医者にはならない決心だ。」とすることができ、(27)は「その言葉が森閑とした昼の中に繰り返されるのは異様な調子だ。」とすることができ、置き換えが不可能な(24)は「*鮎太は彼もまたあすなろだなと好感だ。」とは言えない。このことは「をもって」がはたらく次元に関係なく共通のことであって、同様に「をもって」の「で」への置き換えが可能なのは(19)は「仙吉は疑惑警戒の眼だ。」、(20)は「課長の外山三郎は笑顔だ。」のように「をもって」が示す名詞に「だ」がつくと様態を表す述語になるが、「をもって」の「で」への置き換えが不可能な(18)は「*それはたしかな具体性だ。」とは言えない。ということは、逆に考えれば、名詞が「だ」をともなって述語となりうるか否かにかかわらずその名詞を付帯状況として示すことが可能な「をもって」は、名詞の述語としての可能性を持ち出さないまま、つまり名詞を名詞＝ものごととしたままで状況として示すはたらくき方をする点で「で」と異なるのだといえる。

以上、本節では後置詞「をもって」が多次元にわたって有する機能を観察し、さらにそれぞれの機能の「をもって」はどのような格助詞と置き換え可能か、その置き換え可

能性を左右する条件は何かを調べた。これをもとに以下では、第3節で「をもって」の機能が正確にはそれぞれの次元ではたらいっているのかをまとめたうえで、第4節で格助詞への置き換え操作から各機能の特徴そして「をもって」全体の機能的特徴を考察する。そして第4節における考察に基づいて、第5節でそれらの機能同士のつながりを考察する。

3. 「をもって」の各機能がはたらく次元

以上、後置詞「をもって」の機能として①～④を見た。これらの機能がどの次元ではたらいっているかに関しては、まず、①動詞の項（対象）を示す機能は次元Ⅰではたらいっている。②動詞の非必須項（手段・道具）を示す機能は、修飾語と補語を区別する立場では、普通手段や道具は補語の中に入るといって次元Ⅰだといえるが、動詞の意味を充足する必須性のない非必須項であるということは事態構成のなかでも周辺的な要素であるということであり、限りなく次元Ⅱに近いところの次元Ⅰである。一方、③限界は状況成分であり、事態の外側にある情報を提示しているので次元Ⅲである。④付帯の機能は、はたらく次元に幅が見られる。付帯はその名の通り、プラスアルファの要素であるけれども(16)～(19)のように「をもって」が示す名詞が事態の成立に不可欠で事態の中に食い込んでいると言える例もある。一方で、(21)～(29)のように、後続部分の事態と完全に切り離されて主体や事態全体の付帯状況を表す複文前件に近くなっている例もある。このように④付帯の機能は次元Ⅰ～Ⅲまでの連続のなかに散在している。このように「をもって」の機能が多次元にわたる様子を、第2節での格助詞への置き換え操作の結果とともに示すと以下の図のようになる。〔 〕内は置き換え相手の格助詞。「×」はどの格助詞にも置き換え不可能であることを示す。

次元Ⅰ	①動詞の項（対象）〔を〕	(16) ～ (19)
次元Ⅱ	②動詞の非必須項（手段・道具）〔で〕	(20) ④付帯〔で・×〕
次元Ⅲ	③限界〔を・で・に〕	(21) ～ (29)

4. 置き換えから見る「をもって」の機能的特徴

前頁の図のうち、置き換え操作の結果に注目すれば、機能によって置き換え相手の格助詞が異なることから、第2節の機能分類の妥当性が確認される。さらに本節では、前頁の図のような格助詞への置き換え可能性から、「をもって」の機能的特徴について考えてみる。格助詞への置き換えにおける「をもって」の大きな特徴は、はたらく次元にかかわらず「を」あるいは「で」への置き換えが中心だということである。各機能の「をもって」が単一の格助詞「を」あるいは「で」としか置き換えられないならば、「をもって」の機能的特徴は「を」に置き換えられる系列と「で」に置き換えられる系列に大きく分けて考えることができるのではないだろうか。

まず、①動詞の項(対象)③限界は「を」へ置き換えが可能な系列である。格助詞「を」は、内的限定格対格の格助詞であるⁱⁱⁱ。第2節で既に述べている通り、③限界の「をもって」と①動詞の項(対象)の「をもって」は、「をもって」で示す名詞を対象に据えて、ト格補語で示される状態に定義づけるという意味構造ではたらく点が共通しているのであった。ここで、注1でも示したが「をもって」には二つの派生源、ヲ格の名詞をとる動詞「持つ」のテ形「(～を)持って」と漢文訓読由来の「(～を)以て」があることを思い出せば、①動詞の項(対象)と③限界の二つの機能は、「を」へ置き換え可能であることを根拠に、「(～を)以て」から派生した系列であると推察できる。派生源の「(～を)以て」の時点で、何らかの概念的意味をとりだそうとすればそれは対象や手段、原因・理由といった文法上の機能となる。①動詞の項(対象)と③限界の「をもって」が、内的限定格たる対格の格助詞「を」で置き換えることができるような、文法的に見て非常に機能語的な性格を有しているのは、このように派生源「(～を)以て」からして既に当然のことであると考えられる。ところで、③限界の「をもって」は「を」以外に「で」「に」への置き換えも可能であるが、これは時間的限界という表現効果からの類推で可能になるだけであって、「をもって」が③限界の機能ではたらくときの文の構造は基本的に①動詞の項(対象)の「をもって」の場合と同じであるから、「を」への置き換えが可能な系列としてまとめることは適切だといえる。

一方、「で」に置き換えることができる②動詞の非必須項(手段・道具)④付帯の「をもって」は、ヲ格の名詞をとる動詞「持つ」の中止形「(～を)持って」を派生源とする系列である。②動詞の非必須項(手段・道具)④付帯の二機能の「をもって」はすべて「伴う、付随する」という意味合いを付与しながら主体と手段・道具(②)や主体あるいはそれを含む事態とものごと(④)をむすびつけるのであるが、この「伴う、付随する」という意味合いは派生源の「持つ」の実質的意味に由来する。そして、このような「をもって」の機能は別の見方をすれば、「をもって」で示す名詞を内部的にしる外部的にしるその事態に添えるというむすびつけ方である。この「添える」機能は、

間淵 2000 が「動詞が表す事態への消極的参与」がその基幹的用法であると定義するデ格の説明、また菅井 1997 の「主格や対格に対して背景的側面を提示する」ものとする一般言語学における具格固有の特性の説明と通じるところがあるのではないだろうか。ここから、「(～を) 持って」系列の二機能の「をもって」と格助詞「で」の置き換えが可能な理由を説明できるのである。

上記の図のように①動詞の項(対象)の「をもって」と格助詞「を」、②動詞の非必須項(手段・道具)④付帯の「をもって」と格助詞「で」はかなり高程度合いで機能を一致させる。そしてこの一致は後置詞「をもって」の派生源の二系列「(～を) 以て」「(～を) 持って」に応じたものであり、つまり根源的だからこそ高程度合いで一致するのだといえる。この高度な一致の帰結として、③限界の「をもって」がどの表現的側面が前面化するかによって「で」「に」に置き換え可能であったり、④付帯の「をもって」のうち名詞に述語性がない場合は「で」への置き換えが不可能であったりすることを除けば、本質的には各機能の「をもって」と単一の格助詞「を」もしくは「で」との対応を描けるのである。さらに、内的限定格の対格格助詞「を」と、「にて」という元々の形からを考えれば格助詞としては論理的関係構築力が低い外的限定格の「で」という格助詞の体系のなかでも遠いところに位置する二つの格助詞が「をもって」の置き換え相手であることにしても、異なる二つの系列からの派生を根拠に説明でき、それがまた「をもって」全体の機能面での特徴であるといえる。

5. 「をもって」の機能同士の関係

以上の「を」「で」への置き換えがそのようになることの説明から、後置詞「をもって」には漢文訓読「(～を) 以て」由来の機能と動詞テ形「(～を) 持って」由来の機能があることが分かるが、そのことから「をもって」の複数の機能の相互がどのようにつながりあって、ひとつの形式で多様な機能を実現しているのかも明らかになる。第4節で「を」へ置き換えが可能な①動詞の項(対象)③限界の「をもって」は派生源が「(～を) 以て」の系列、「で」へ置き換えが可能な②動詞の非必須項(手段・道具)④付帯は派生源が「(～を) 持って」の系列ということが明らかになったが、それぞれの系列の内部はどのようにつながっているのだろうか。

まず、「(～を) 持って」からつながるのは②動詞の非必須項(手段・道具)と④付帯の機能である。このうち④付帯の「伴う」という意味はまさに「(～を) 持って」を構成する動詞「持つ」の意味である。この④付帯は名詞と「をもって」全体でヲ格名詞をとる動詞「持つ」のテ形から修飾成分・状況成分へ移行したと考えることができる。第2節で観察したように④付帯の機能の「をもって」は次元Ⅲから次元Ⅰでまで幅広くはたらくという一方で、「をもって」の機能を次元Ⅰ～Ⅲまでに分布させる。

同じく「で」へ置き換え可能である②動詞の非必須項（手段・道具）の「をもって」も、以下のような例から動詞「持つ」の中止形とのつながりが考えられる。

(30) 稽古場ではきびしくって、弓の柄を持って弟子の臀をぴしゃぴしゃぶって……。

(楡家)

特に(30)のような例は表記が「持つ」の中止形であるだけでなく、動詞「持つ」の語彙の意味から「弓の柄を持つ」と言えることと、後置詞「をもって」が道具を示す機能とが、「を持って」の中に重ね合わされ両立している。道具を示す「をもって」は具体物を表す名詞をとることからも、動詞「持つ」とのつながりを断つことはできないだろう。

一方で、「(～を) 以て」を派生源とするのは、「を」に置き換え可能であった①動詞の項（対象）③限界の「をもって」に加えて、②動詞の非必須項（手段・道具）の「をもって」である。「行為対象」の意味も「手段」の意味も漢文中の機能語「以」がもともと有している意味である。後置詞「をもって」が「対象AをBと考える、定義する」という意味構造のなかに入っていれば、「以」がもともと有する意味のうち「行為対象」という、もっとも機能語的な意味を得て事態構成要素を示すことになり、①動詞の項（対象）の機能を獲得する。一方、他の名詞によって既に対象が示されている意志動詞文、あるいは自動詞の意志動詞文においては、「行為対象」を表す機能語はあられわれず、「をもって」は「手段」を表す意味を得て、②動詞の非必須項（手段・道具）の機能を獲得することになる。そして、手段とは抽象・具体の違いはあるとしても文に添える意味は同類である道具にも用法が拡大するのである。

「(～を) 以て」を派生源とする系列の、残る③限界は、文の構造の点から①動詞の項（対象）のバリエーションと考えられる。なぜなら、③限界の例である(13)～(15)においても「対象AをBと考える」という意味構造が成り立っているからである。たとえば(14)は「これをもって終わりとする」という意味構造、(15)は「来る十月七日をもって流質とする」という意味構造だと言える。ただし、これらの例においてはAの部分にくる名詞が量や時間を表すものであり、一方で同じ文中ではヲ格名詞で行為対象も示されていることから、Aの対象性が裏面化し、「Aをもって」の部分が時間的限界を提示するような表現効果が生まれ、事態から切り離されて状況成分的に解されることになるのである。

こうして「をもって」の機能同士のつながりを考えるとき、②動詞の非必須項（手段・道具）の「をもって」は、格助詞への置き換え可能性や「伴う」という意味合いからは「(～を) 持って」の系列と考えられる一方、手段という意味からは「(～を) 以て」の系列と考えることもできるということから、機能同士のつながりに関して二つの可能性がある。そのように二つの可能性があることこそが、注1で示したように二つの派生源が考えられる「をもって」が現代日本語の使用者にとってはひとつの後置詞なの

i 後置詞「をもって」には動詞「持つ」のテ形から派生したものと、漢文の「以」の訓読が日本語の文章に定着したものと、出自からいうと二種類が存在する。が、ここでは現代日本語の言語現象として「をもって」を扱うので、表記の違いによる区別はしない。現代日本語の使用者においてはもはや、後置詞「をもって」が派生源による差を意識されず、ひとつのものとして認識されており、「を持って」「を以て」「をもって」の3種は純粹に表記の選択の問題と思われるためである。ちなみに、「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」内の同じ調査対象から観察できた用例総数は、「をもって」197例、「を持って」32例、「を以て」67例である。

ii 三井正孝 1995 による。

iii 菅井三実 1997、間淵洋子 2000 参照。

iv 注iiiに同じ。

v 間淵 2000 は格助詞「で」が基幹的用法のひとつである場所格を抽象化させて獲得した用法として<限定>の用法があると主張している。

vi 内丸 2006 は動詞のテ形を伴う節をとりあげたものだが、そのなかで内丸は「花子はしゃがんで絵を描いた」のようなテ形節を付帯状況のテ形節と呼んでいる。また内丸 2006 の付帯状況のテ形節とほぼ同じ性質のテ形節を、南 1974 では「動作のようす、しかたなどを表すもので、いわゆる状態副詞に似た意味を持っている」従属句であるとする。

vii 添田 1970 では、上代から中世の資料中の「にて」に関して、用法別の出現数や出現状況などを調査した結果、「にて」の成立を(イ)「にありて」→場所をあらわす格助詞「にて」。(ロ) 助動詞「にて」→状態をあらわす格助詞「にて」→意味的わたり行きによる格助詞「にて」の、場所、原因以外の意味用法。(ハ)「によりて」→原因をあらわす格助詞「にて」。の三つに分けて説明する。

viii 格助詞や格関係の先行研究(川端 1959・1986、城田 1993、Barry J. Blake 2001、青木 1982・1989)では格関係を、論理的な関係構築を本質とする格と意味を付与することを本質とする格の大きく二種類に分ける。そこで本稿も格に質的に異なる二種があるという立場を踏襲し、「をもって」の置き換え相手となる格助詞がどちらであるかを「をもって」の機能的特徴を考える際の参考とする。なお、二種の名称は川端 1959・1986 を踏襲して内的限定格・外的限定格とする。

【参考文献】

- ・青木 伶子 1982 「格と格助詞」『成蹊大学文学部紀要』18
- ・青木 伶子 1989 「格と格助詞・再論—表層構造における—」『国語と国文学』66 卷 9 号
- ・内丸 裕佳子 2006 「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—」『日本語の研究』2 卷 1 号
- ・川端 善明 1959 「動詞文・格」『国語国文』28 卷 3 号
- ・川端 善明 1986 「格と格助詞とその組織」『論集日本語研究(一)現代編』宮地裕編 明治書院

- ・城田俊 1993 「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐって』仁田義雄編 くろしお出版
- ・菅井三実 1997 「格助詞「で」の意味特性に関する一考察」『名古屋大学運学部研究論集（文学）』43
- ・菅井三実 1998 「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」『名古屋大学文学部研究論集』130（文学44）
- ・全成龍 2004 「動詞のなかどめ「～して」の機能の変化と品詞の転換」『21世紀言語学研究 鈴木康之教授古希記念論集』白帝社
- ・添田建治郎 1970 「格助詞「にて」の形成と言語における交替現象」『語文研究』九州大学国語国文学会 29号
- ・間淵洋子 2000 「格助詞「で」の意味拡張に関する一考察」『国語学』51巻1号
- ・三井正孝 1995 「現代日本語におけるヲモッテ格の意味」『静岡英和女学院短期大学紀要』27
- ・三井正孝 2006 「格助詞らしからぬ複合格助詞>ーニツイテ、ニトツテ、ヲモッテ、トシテの場合一」『複合辞研究の現在』藤田保幸・山崎誠編 和泉書院
- ・南不二男 1974 『現代日本語の構造』大修館書店
- ・Barry J. Blake 2001 "Case Second edition" Cambridge Textbooks in Linguistics Cambridge University Press

【用例出典】

用例はすべて「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」から採集した。本稿に掲載した用例の出典は以下の作品である。括弧内は本文中での略称を示す。

『焼跡のイエス・処女懐胎』石川淳（焼跡）／『あすなろ物語』井上靖（あすなろ）／『剣客商売』池波正太郎（剣客）／『楡家の人びと』北杜夫（楡家）／『太郎物語』曾野綾子（太郎）／『新源氏物語』田辺聖子（新源氏）／『冬の旅』立原正秋（冬の旅）／『二十歳の原点』高野悦子（二十歳）／『二十四の瞳』壺井栄（二十四）／『こころ』夏目漱石（こころ）／『孤高の人』新田次郎（孤高）／『草の花』福永武彦（草の花）／『人民は弱し 官吏は強し』星新一（人民）／『点と線』松本清張（点と線）／『人生論ノート』三木清（人生論）／『塩狩峠』三浦綾子（塩狩峠）／『さぶ』山本周五郎（さぶ）／『花埋み』渡辺淳一（花埋み）

（はやし じゅんこ 大学院人文社会系研究科 修士課程2年）